説法
四巻

書都の巻

三

中村俊定文庫
文庫 18
611
3

誹諧問答拔萃 巻之三

浩々舎芳齋校定

再呈下

一前ふる尾丸年ハ集ふる所ハ葉傳文の和遠ふるを
と欲くくいるふる他の撰集ふあらく伝風ふる門蟬
矣菊ハ香ふ京乃玄梅ふ集の名
抄是ふ統中玄梅ふ集ふるの道加賀ふ枝ふ裏の名
ふ京ふ義ふ毒ひ宛字伝文ハ幸乃和義とふ
二十余年下巻ふ十六七ふ
吟味ハ如何ふ

一ゆふ雅し作り高野先生其あやまりとひろかい
風雅集や風國に去来先生の引句しゆふ雅なるみれ
人しれぬ集作る時先生内見なり紀年をあはし
空をゆくまり初蟬より雅して云く作者其あや
ゆりの選りゆふてなやゆりよあるしに撰者の誤り
也を中に撰者乃句其ゆふ集蕉ひをきられたるお
さ身一句見るし出ちりなるに落れの集みなり
里市の顔蜜をも桃年れ考蕉ひうれのお蕉あと
ゆふ出しをるれあれ去をなり先生其撰をたまふ
あらをやるみ其二集乃出ちかひ所をんを

きりはいてゆふ鳳ゆふ去るれを是あやまりてかりく
あやゆりゆふしに
一初蟬其をよ空の時や方を引れ先大津玄香
句うをひの時やとなりゆふ又方をやいふ孫しをたく
こうや空れ噂の音をひをいふ年をりんは
かをれたる年をりし出ゆふに乃やりて撰ゆふこれ空
をへ乃れ家句をんに得ゆふ乾作者年撰者同句と見へ
なりをられゆふをやへまるとへへ見飛をし
一正巻ゆふ行風其吹うあ日あり乾樽の那　大津　柄主
てゆふをよりゆふしかりをや空をして求と留めへ新古同し

抜すれまで何と聞ひて詠ぞと侍りまし樗良の形にて
治定の辞なれともこの句全躰かなひの句なり
点付らるゝまで花の散らんと心み侍れは句
柄もかなひ志まじき事を切字にのれて嘆へれ侍り
この入きぬるのやうぞ古来より定め来る聞とうへも
かやうの事なり何ともいふ字をとめまてもまさ事と
嘆に定めおきて只一段んば嘆へてしはしも外句のまゝを
用ひら切字外句のまゝを付べき事也

鶯の声聞きしたる樗良

此句ハ全躰治定の形也何風をも嘆ふの日落る樗良

八全躰かなひなり何となく字嘆へは何をも嘆かれ
日落の玉樗となりさもて白樗となりとも心へは
なる事なきよく嘆ふ所な

雨風の吾為日も枯れ聞樗良

此ハ只嘆へ何かたに風と心為聞ハ風の趣向も成す人
て心をむ為の文字なりと見しもうこれ世俗の平話
にいひあやまりたる事とさの俳諧に流る神て聞細
やさの句に限らず何と云ふ字を多く起ひてみや治
まる聞句は世間にいふもこれ偏にてよく志ぞる
何といふ字の方の句を切て見候の落着よく嘆へ

行う想別平話をと文言ふ書遠ひ行くすあり分別
なりに半行きこあり中や酒里多したくさ行くくる義
句もあるなりいくあれ何なるやと行て笑へ行くも
下畧れ何なるり直宇に毒事なるやと以ふ度と行く
いなる指ると毒れ詞やしよく笑初りて毒ふ合遠
くまれ里文章に行てくふ紙射面くあてを
何といふ面笑へ行ふ謝潜ふ文言なり俳潜平話
宜といくも此味とけてそれふをひけれ事い
行るなれ度なり

何のあれ花ともあれ有うれ

といくまれハ行の言句ふれと切字言葉せうれと思ふ
里花ともあるとまるり何れふ笑ゆるうあふ
ふくくく侍れなる何ふも吟ゆ日落れ花ふ那
ふまるくれ

芭蕉葉ハ行ふりあれてる秋風

是行ふふ又や笑いへくくれ行ふあれてやくれ
何と云ふれふ花ふの中ゆ和乃くくをふしケ
拾れ潜句いくくくくるるくくれ
一上巻ふ

春風や雛聖の炭れ行ふ

見ゆるに松れし事なりあるとそすしといひかつて
茶うをやとうとかひれやいうとれそこつかをへ
きうかをあをみをうるにやうてを中れをみて
なしかかせた
一ふれ美ふ

夏艸ふ肥ふ鹿のむしを答ひうやうれを乗
ふたるをしやもをくれ句ひくれを和ちれ
ハ真分ふうなてくうを見くうり明ものを
てひみむ時ハ一ふそゆをふ六百貫れ合

せをれ綱を乃ふ法ふれ言ひてし大事に論しよ
きの変を毎の漸諧をりをう後成れ論ふかる変
をしを又変家の宣ひを新辛ハ法けかりみてよく
もあしをそふ横れつをとれ新を宣ひを新
ふれをう

いを萩や物の進む秋れ風乃青　馬佛

見ハ萩を萩をふみあやをうをむを常むをようみちう
ひを新をとをたを常れ進むををに法をてつうハ
しを新をうを横れ見あやふうハをもあへしをし
伊勢れ萩少をを一句ををへかをしなをみををすて擂

集に入りのみてやいてのらし伊勢ぬ濱萩を以の幸をとゝ
文をふいたらを萩をふいたるの空作者ぬ愛吟か
里浦ふあ乾みのゝ花ふ手あゝび拾うゝ加ゝ伊勢
萩ゝの日ふ葉をあをてゝいををるゝ〻ゝ世をの萩を
をゝいをゝをかゝんを

一上書ニ

笠物て物語を聞をよ月表　朱迪　表根

笠持てゝふ方し笠持てゝ拾てをいそんとゝゝ
笠ちゝ空し志ゝゝ物語をのゝゝ句をを下草ぬ
情をゝゝ云ひかゝゝよ紀諧ゝゝ作者を自

慢ゝに笠持ふて八作者をカ拾ゝし作歌ゝ拾ゝい
見あやゝちにゝて濃ゝくあや句をふ河ゝ作次ゝ
まゝにまゝを

おをゝろふてゝ屋てかゝ紀物無ゝ　毎

この句変ゝをゝをあゝ別接考ふをゝちゝの
上要ゝをゝゝゝゝ就し作ゝをゝて紀俳歌あゝ
を歌あゝ歌ふ紀をゝをゝこの句あゝ歌ふいゝて
てゝ下にを巣ぬ意をゝてゝを笑を幸歌句や

一下書に

七夕やいをむ変ゝ変ゝ変ゝ　伊賀　猿雛

けさ七夕やれやれとうとう経ひけやすう
ちかうちかうさあらうあれやあのうみうへ
てたつのふきつるは行事ふ七夕やうとうひけち
たるとてはいそもすうとうと変ぜて新八とて
蓋すし七夕をを七夕れをハ四ちあれ屋れ句やし
うやうれみまかをを長れ変撰著乃役ちう長う集
ち時加賀れ妙技ち句

発句ちをををちう長をう

とうへてちう加へ去ちとうをれうをを笑へ法加へをを道
せそめちう笑を加年せう変あを

一下巻ふ

吟月や空ふ変しを新をを　義

この句明月の産ふうけしををこれ変句ちく
一ふの仙あちう使し変あ明ちを乃知れをを明の産
ふかく事いうを名月八月十四夜一夜也四月を四
事ふ屋屋明の産ふく事あ法やかあ法ちう
ちを笑へちうあ

一下巻ふ

四月や法新乃をしかくや　雅　風国　撰著

見てをしれしの産切ちう笑を知ふを乃をたちをれ未

来ぬにしはて切れや此月やと切んでしと切てこち
られそのつら明月やと髭ひ見てしと給ふまれさる事
五文字うきうひ覚(うつ)て悲れなし此月や紅明月ふ
流転(るてん)ぬんていしと云ひうさせはよくさまへ行まま
上古の句作(さくれい)わりまた亦糟糠(さうかう)に

　　糟見てし花に明行神の影　翁

是翁の句ぐかかりらちの枯葉(かれは)まて吟(ぎん)しうふうそれに明(みやう)
行(ぎやう)のかぎみと文此月ぶかくや姫(ひめ)の影(うつ)も以て其かを
と吟(ぎん)味なさるとみへてられ拝しき事なり

一下巻了

　　こゝれもいろもかゝらん花の薬剤　奈良 玄梅

此句さそく作抜(さう)の花の句なりかやうの句の手本
葉をも見てふ古人(こと)文運(ぶんれい)新例(かく)なしや嘲(あざけ)る事やしる名
もなかるうん也に事支大かれなりかれ古漢(さうい)ありて名もう
ありへしとらうて筆紙ひわやまりてなかるらん
也それ給ふまかれなり拙(つたな)き作者撰者の胸中(きやうちう)歌合
せし事ふ便の以すらや家(かう)堂(たう)ろやう此句の手の葉を
経てはふんと以ふなり上下万民拝しなへてかんせ
めてれ以ろてなりかるさぞらさいへまりしまさらゝも
かまへは

一下葉子

鶏壺に初うの林檎の実　沢見

古れ眼あ素人の実を入れ変ゆ行くれまる撰
者の入れ変れ句ともあ〳〵たうしけうも
猿これ水

鶏壺やそうなれ変を変れ月　毎

見師れ変句空いひ壺変浦く素事一天下きく人
なし古雅井のりく制れ詞ちりトいうやうふ
ひうくても鶏壺この句れ眼ちり玄梅うあり免こる
水惟慈々句に

長宗方新秋とや鶏も壺れ中

見浦れ句の下毋あ新こあやゆ下う集れ時もこの句加
なて拾くれ見大きこい面く家黨小便壺こい拾くやし
この水いくらも行れ空も塩見れふいて浦ち切こ
二つ入くてもちくひふうあへ新句もあを師れ句水乙
ムのの小事稀水くすくちく今の世乃ち石こいい沙
ちちく拾ち事ちり望本くいふもの板木水出てを
上六番一を切これ変を古ち見せ古く
一番一初ちこれ句の影号八淋しこや岩水古みこ悲れ
契れ句ちりおくちゆ小惟慈坊こ出こ新変ちくひ

きまし給ふ所にて此よこの句幹と影号は其者の奥よりのたりこれ有ける賞翫をや影号とす所にて此の物句を雑句定め給へし桔ふ出入こと幸影号ゆゑ賞翫うけてなしこと世はかなきい毎所集ふ人出ぬ所にしこと多ゆゑ新しみ奥ふ出入こと所以の外ふ賞翫をなへし古所集へ出これをてをふ賞翫しきをへし序に出こと所こと人ふ苦しこと所

秋来ぬと桔梗刈るや夢ふらり

古句幹来ぬと文字ふ牡丹と所

多ふ集ふ有しこと所

六百番千金ふ

秋来ぬと月ふさやふ見ねる

月の中ふて牡丹ふかれぬる

秋来ぬと風ふ乃句所

古紙涼しさふ寄せ所

経家卿

この二首ふて古所ふ秋来ぬゆゑ月ふ中ふて牡丹ふ寄せ所

ゆゑ月ふ中ふて牡丹ふ文字ふ所ふ乃句ふ古

下に寄せと詠ふ文字ふ用乃句ふ古

詠ふ所ふ所而古所ふ人ふ所ふ所ふ

見ふて所ふ所ふ人ふ夢ふ見ふと所

とまりハ下へはらふ也その文字へもどる事なくてハ
叶ふまじきは物かへる也されバ句秋来ぬめとこと
申すりやさとて覚へけれとも又ことゝまりぬ
文字新秋来ぬと古読もあるへし撰者(せんじや)のかはれるにて
不審(ふしん)は志ありて也して撰者撰集さすべく
杜若も得りなし
一概にしるべし

秋風や維ふかゝ淡く栗丸いろ　豊後　幽泉

この五文字乃や難ひたまひまさり給ひてもかゝ清く
覚えらるゝ也ひたる秋風やとさら新秋ふ秋のいせれ

更なし下ハ栗(ぐり)丸いろのことのゝきゑてより

秋の色維ふかゝ淡く栗丸いろ

とあらふ姉尺りしたのるいうハたれかのみつくとき
又下し秋うせやれ文字にて後ふ風せんなしと外て
まく尾この不放なるを晋子(しんし)の句ふ

初雪や内ふ居ひとふる人を維

此の句初雪やとうさひて後の縁絵(ゑんぜつ)のうた
また此句秋風やとゝひて後ハ栗丸来りや切字
二つあれとも家往一句連続(れんぞく)して上下のけ句な
らてハ二つ二つ用うし二文字切三季切ハとの格(かく)や付句

志州鳥羽内に在ける人を維
此は佳なる句なりみの字重畳せる故に御吟
やとはして卑(ひく)き(?)捨(すて)やれんなかゆる句乃
真似(まね)をして借瓢ともてふる肝煖(?)て自由を成る
といへるもてふとはいかりのてあそびかし

物とりや誰ふかく栗れいか

新かしくやけふもやらして維も見えれんか
一同集了

稲妻のかきませて行く夜頭かな　去来

是先生の句やや表れ年尋に至る行経

月鏡丹之表をみいひぬらしまき落ちくをなりや
ミ表しるを都鄙(とひ)の詞にもまゝ通俗やゝ女らの
事をおかりては作者乃手(て)擲なりし新しくみ云出
ども擲るれは言語(?)浄(?)手にはあらまし底くしくかゝり
おふそよみ通信れるをに出ひかりおそれとも数
の字入ては八ゝ年を歎あるしてはいうす覚え未なり厥
数百九百九十九人浅からさるてなりしは覚えて一人
面白しといたむいふたなるに機(き)なりしんを
一同集了

行はしもいでむ篁れたやえの月　風也

義の文字ちかくれど義ナ云とハいかにもしきりそなたらぬ
此くふかき葉をかへりて連續させて今ぞ見て来り
志れて侍らず侍り

命ニツ中に活たるさくらかな　翁

是命二つと云事ありてなる年をへて庵にて備
期此芳野に杖をとゝめしよふの事のてありつ事にて
見れハ夜乃いふかく志くし志らさる時是是非
し志かし風国の事にのさうし此社にうすく以庵
所事おもハ見ざりけるといふにて
一同集よ

寝もなや別て芽花そのこ志しみ　惟然

さて〱大綱なる就切字数大かたにて手易きを以りと
まれとも深夜へすゝ移るなるをやれやも七ッめ
やみ中にて切るきやいくほどのそれ字にと入るゝ
それなりて其入花の字をすゝべし
一あの外合点しかく記てふたおわれとも言のくなる
左其ハ余ふ議論や句外よしおしハ人のまを記す
されて讒接あらいしかくしてふ葉のこそ一字を勧
うくう習ひ法格式押へ字この事や先生よく
知る事なや歯にきかせてはらを閉るそいふハ

この変化世ゝ漸潛をいなし　紀梅が枝にうぐひす出て　紀貫之
まんゝとなる事　とおもしをたれとも　つゝみかねて
おぼゝしく　行れいまゝ　おもむかぬ　昌
一加賀の校集に云　延喜三年忌に本弟塚へ
て　延喜　紀句を出ぬ
　　梅捨て　塚をまもるや　村雨
　　紀句
句ふかゝれ　変化　湖南の元もとより　紀
句集の序文に書　中の七文字　乃
言ふ　ひとり　邊　加茂　延喜　昔に乃
何れ　ふかひあるや　梅部　自句　他句　紀
知　作者　この句　梅に　塚を
梅やと云　他句　自句　句ふかあらんか　賀
なこの句　校に変化　紀ひとり　句
やと切字　入れ　義句　光　ふ
の作者　撰者　紀　長
ふる　紀　作者　紀
師　紀　句集　句
句を　紀　句

一秀秋〻歌号して云う句ふ

大花なる秋行く秋れ夕ゆう紅

やしい白き秋の書歌ふ入てうらの白き梅れ白ふ

あしたに古来秋の書入着秋あしたと言れ書

きて秋乃夕ゆう書とふ変のようにきみつちあし

般集ふ中秋の紅よ入てう書とふ野して秋の書を

書秋を知れうる人稀ふ入秋れ書の表ちう稀意入秋の

書ちよ白こう余入紅秋くふ白やあきれ書

ちゑちも書秋れ古ふ紅よ入て誘を蓮てう白もあう事う

撰者事う白ふ

のひくて秋ちうふ菊や　秋れ書

秀秋をう稀て九月の中にひうち妹乃義をみれ八月

ふ乃影やしうの集をてふをあやあちと論せ八ふ妹を

事　彦之文れ自白をて大方ハ忘れきう

一事う雑問ふ云く迎年をう命　記集ちを出

ふていうれてくの変ちう乃拾て中行ると云

に色あしたる新をもよく学まけ入一白を理

ふ学へ行れ色ハ見ハ見れ抵ちう

一行ちを学ちうみれ二集かるの記ちうひれ事

上巻序又ち教め扶れを志ちうれちん第の

[illegible]

一猿養下書 諏緒子云

芽 芽村小蛙 [illegible]

蕗乃芽とうに行燈申消 毎

其の白ゆりに[illegible]

[illegible]

お 嗅 契 [illegible] 藻 [illegible] 縁 [illegible]

添くハ[illegible]

其の添に[illegible]

[illegible]

[illegible]

今[illegible]

奉行[illegible]

一[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小えん〜既小えんすると度人情の二病より毎度古の雅
潭をよもむ付きて〜花折り見西退て吟味きれ
きこの二字前句よみむつかし〜師亡世れときさきれ事
沙法行〜花ちり先師よく初見めりんや深てちり
ら去る花和尚に孫さとすし
一文通小云く風国巣且脇の事是是集れ句よ似行る
よ〜ちく氣と法をらく変ちり式句金く等類れ
深行る句〜

藪そうこうの浪 巣れる明
古の句えん浪 誠れ在家のあ所れ月ともしに去新

居和ちふ小ちくこの風情とひくちり品さしく深
水景園一遍ちり在家れこ言とめて八一句魂ちく
ち乾坂是抵ちく藪ちうくめと仕人行ちめ古の立品
世こ意小てよ句世古乾八猿義の青て花ち明れ月
のこちくちかちと古の句藪ちうめてちなし
行れるまちと行〜合八

月夜れちの浪我ち吹ちち
ちく世〜て七一句京世れあちくしく付くちい
くくも世〜行ちく

藪れ明世む宝家れ古の事

古の藪は明らかにいふは初春とくに花咲き藪うゑ
上七文字は中十六の縁語あり藪の名止むとかかる
さたちくてふ世代絶すと記こそ頼向ふまうしこそ
れは明らむといふ七夕より出生は句意は品格の上
を似て記まてみく魅拙別は句意似うすと倫
すへあるも耳にうけ角うしは但古今尾張を
伊勢は崇且引隠の中に藪のうきはをかしは
者もら家さうあ〳〵中〳〵屋敷句あり〳〵拙は
作は是春を智是古〳〵もいひかへ者と〳〵屋
も之本は新向流儀の文体面は〳〵変なれは

如何〳〵いとむら立つと大綴り出る引隠の帳は中
なれは能見えて者新〳〵もるくしされは見集よ
布鼎買ふ者のはたらへ屋敷
〳〵句せ〳〵みるとふいきしうは絶尾集
は者ふいみ

六の巻先へ句意堂は迎ふ
巻句あり是芳新ら陸分味をうるとと
いくも影〳〵して後梅すは花の八先へ巻〳〵云
七文字みく下をめ句拙ふも屋〳〵みるうく
元は句新題は六の巻はたへ巻〳〵みる度也

舟のそとよりみたるを先へ出す

とゝを言ひ又ハ

丁稚を寄せて先のハされへ出す

なるべくをいくさくらいひうへあしんをれとも古れ多

彫ひの罷れたるをとゝ

一先生當家且又多くなるを百やれすをうてうれし

とゝ時代四五年も古う新角しまやを百やを

ゝ文多たるとゝ新しくをとゝせ行しす

ハ来とゝんう殊ハ和ハ百ひうしたるゝ文多

ちうこ四年ゝ前ちうたるを行を変

ちう蘿蔔成空大編くすをとゝかを新くゝ行ハ

刷ゝ仏塔しかふ角ゝ先生ハうを行もふをやを

先生ゝ

一東京牛尾の牛ハ是をもつて手ハうれしかゝた

牛の尾弾の和面白しふ人すれ白句をゝ入ゝ行れハ

貴角ふをを物をくとゝ云んう其すくゝ和よ去をうれ和

行ふ四ゝふ俗ふうふうとゝ変うとゝひをすゝ退くゝ来ちう

に春の吟門事ふすゝ俗ふゝ一ゝ者あう大うとを植

れ味ふてたをの時代余をを作者ちう去うやをを

杜平くゝ孫くゝを新古れとゝふうゝ表角をを先角

おへふ是くいまんか中く藝倍の友の及ぶ所にあらじ
一事も評して出で家離して因古来より出でてをれ
前の加の類に折合にも加へぬ拙なれハ事にて
と作るの作にまことゆりの其の句に節の句を重ね
何れもそれそれも事ことよろしき変あれ充平意にて
我か志かし我句にも見去れしかも切字我句なし
予旅も達人ハ世事したる事と思ふ志かれ人もあし
文字にて切字と旅をおへしよらにて兼志ちさ
此者も去れし切字と挿ひて至る事も喚ら
待るも無念なるを人くいひまけも旅まし名れハ水性

論せぬ支考事急しと予ハ終に世に但色去れし
にて切字も其の我句にすなちらよろしき句ならしハ
句をなりるに変形に外れの句

又毎の志さらに悪し　雉子乃声

うかの我句なしに擬事あり作し貴句高嶽
旦於事にての変も去れし文字同前也而し説事
と私もひ先達ハ旅のひのみにてしまにて句
其よ於と思ひて待る事も喚らむも称ん
拙字人其の一句述懐の事にて中なし待事ぬ
御旅りひなしや

一ゟ當家迄歳暮ハ年ごとに捨ものゝ
なりゝ引附帳ハ出ぬ惜ハあれ共せん方
なく書捨なるべき家迄ハ物ゝ入へし略ゟ初
元金ゟ取ハ出ぬ惜ハ取ひてもかゝる乃
物ゝ入へし紙屋かゝる仕ゟ出ぬ仕損
しなく〻達人なれ共せめ変ゆゝ角〻なる
句なりて八幾句ハ云物なれ共あく
し澤山ゟ云出ぬ〻変なれ共承遠捨角ゟ年
なり此迄紙の後ハ寄ゟ自己
に変ゟ句なりいゝものハあ共角〻

扨ゟ仕ゟ向後ゟ〻〻〻〻〻〻〻変なり角〻
仕損〻なるゟ自己ハ変ゟしてゟ取ゟ
仕〻ハ二限ゟ入〻中に〻ぶゟ自句角〻あ共変
なり意変乃角て口年へ出ぬ年なるべし人
ゟ〻〻ハ取ハ物角ゟ〻ゟけて句ゟなりなり
ゟ〻ゟに人〻乃ゟハあり言ハ年ゟハ出ぬ
ゟゟ乃仕損しゟなりたゟひゟ仕ゟ是ゟなり
〻下品の類ハ句なり

一去〻年迄集家且ゟ

于魚ハかゟゟ集家且ゟ

と云句でしに大津尚白の句を

千鳥ゆゑかゝへたりとそれひと

空云句でしゐもゐひゐゐゐゐゐゐゐ等類ゐ吟味

ゐれかゐゐゐゐゐゐ作ゐゐの事次第相違ゐゐ歩一

ゐれ句撰集に入に撰集よりそれ句を等類新ゐ

ゐ新ゐと後成ゐれゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

句はゐゐゐ新変面白ゐゐて新句ゐ及び

作ゐゐゐゐゐゐゐ面白歩一ゐゐかゐ新ゐ

に服をはけゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐの

時代ゐゐゐゐゐゐ古れ当ゐ句のゐゐゐ

俳諧ゐゐゐ皆ゐゐかゐゐ新変を取り句成ゐ句し

等ゐ新句ゐれて古れ事取り作ゐれ品ゐ雑面白作ゐ

ゐゐゐ歩ゐ合ゐゐゐ新ゐゐゐゐゐゐ俳合撰

且ゐゐゐ語り合ゐゐゐ事ゐゐゐゐゐゐ新ゐ

ゐれゐゐ中日本国中後山ゐれまゐゐゐゐゐゐ

ゐゐ雑ゐゐゐゐゐゐゐゐ中れ変ゐゐ変ゐ作ゐれを

ゐれしゐゐゐ言ゐゐれゐゐゐ異ゐれゐゐ等類ゐ

ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐの句新ゐゐれ

ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

ゐ歩ゐれ歩ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

かゝる強れ者とて八古よりて清華部

なと強ひきらいなく俳諧ふうえてそなし

発句俗の收めあるよりふたゝび新しき額

乃新入りてすべて有りてく自性者と成るくを

宗匠とせ下なら尚自ら者生平生成者大き

ゝ相違なるおよりを出せ侍れか等類めていなし能因

歌改の白川丸ふうてよく志れ申強食れかりをを

慈姑よりも下物なく毎れ下に門をきく色事性質人

常よりも云あまく侍れとも沙あゝ変らひ出し

侍れ八用ひきうていう格うも性るくものやはりを

かるを出いつ変をきゝあれ作者なれ八立ふかゝ人数型言

面白こふ変ひ侍れてうゝきけれかれ数去あゆをし

らあ有ふ考新の俳法をもなる世別格を者数

ゝふの事新向又八絹て数容易を加ゝを数を出

不侍新ゝ人をあゝひ者数中ゝ脇ふ白この古俳弾

数ゝ侍ゝ史ゝきゝ川者ゝ数ゝいてをれゝて加数を

世ゝのふの考ゝ面白く俗乃ゝゝふ西れ志ゝ法者

数ゝ数ゝ変と格五者ゝ数ゝゝゝふ八絹ゝ

ものゝゝゝ西ふ志も西ふ面ふ数西ふ数を加ゝ

しゝゝ言ふゝゝ俳ゝゝ数ゝ数ゝ数ゝ俳ゝ

新しい山桜もまだ蕾みの事てよく覆ひ垂れ枝
なり又戸ヶ白本尊山中にて

山桜も已を出枝因うへ

是ハ檀林時代の句のよく似つまると吹と大抵ふ事
なり檀林は時ハ山伏已ふ直に因をうへ事也たとと
たとと中なり此句山ふ是ハ事なりものて品因うへ
はと紙よくいたん金なんたうに知ひ行ふ也妙よ
勢を星ハ高殘皆出ふ事とふ高ふ拵よ高ん高の時也
時代をよく考へ作者ふ者ふ也 作者ふ者ふ
耳に聞ふ事なり

一沼てなりこ郷に二所 七日長 吉本曾塚ふ事 蕗
拙陳ふ蕗集ふ事 此百貫の事ふ

まるに中よりちを事出雲 乙列
杉は高のちこ高ふ月行 扇吹
なこふ麻の吹く声 なこく 丹野
のひちく高多を楽よ也 流通
付ちここて買ものハ是 刈馬
傘に拵て庭こ雲の岩 古竜

乙州ふ青に菊鶯こ吹ハ何を知南鶯こ吹る
物知に秋は車ふ唐こ行度ふ年紙ハ

とハいへとも文章に法しめ表す時一句南蛮と紆(だら)
ハ用ゆへきのすし趣解て倉うしとあつかふまゝハ
山家と詠ともなへ行る句作なしとハ南蛮とも下畧(げりゃく)て
おも

青くても有へきものを唐辛子　翁

すへあしハ唐からし此句ともにいへし其の句秋妙や
変なるや誰なりしるを座あらしとすしハ変なるへし
香ちても表さしとせは変の風し青変よまるを答
よ云ハうくハ是誰なる変なるゑ常盤(ときは)木の落葉成之
松の葉ちりて落葉の記右二句ともに非背

一座ともに秋と見へてうしと見るなら二句ともに其え
三句発句の句を是まて一句なら番椒(たうがらし)の句秋なし
して中此相の句変なるゆゑ三句ゑて雲の岑を
春ゆめ師遷化(せんげ)しあそしたるや五七三十五日の中に入に
不知表変を往也真ゆゑにて之を捨行ろあまりさへ
梓(あつさ)にちりたる一天下此人の眼よまうしたる事まてさく
此宗に通達の其の合齒(は)ヲとまうし措(おく)不の晁なうれて
く起りしうし先生ハ其ハ毫中此時出座しあつて
必く内へ遠入れハぞいとす表との法一句田舎まてとも
うられなしゆうの集毎にいふとも云教ともなし見ん

歌しゝ指合なるこゝろもこゝろにあらず絶句集ホ
乃雖潜穂れとの巻ふもまれ巻ニ乃出ら又爭唐唐
指合礼吹ふもかゝしてホ紀といふ付句ホ美出て
こゝろ而のなゝ又あらゝゆゝれ事ハ他つれ人ゝてもよ紀人
巻乃ゆゝて論せ紀方(長)巻れ巻の指合ハ拙ちゝ云
ものみて大ち紀狐(ちぢく)唐ちゝ
一方雖潜ち乃人紀事かゝあゝくなるものちゝあゝ聖
猿巻ちをふゝゝ師れ魅ちと乃面け行紀ゝいへ紀
ち見浸紀ちる方ちゝ當時ホくの集ゝ抄て抄や
句れ美恵れ事ゝ抄れ船ふふ抄て論せゝれば

徒(ゝゝ)撰ちゝ角く数ふふ数字ゝ唐紀事ハ抄て紀次
事や家数字行ゝめ句を藤(かう)紀美(び)ゝ紀人ちゝて
いゝれ雖潜ゝいひゝかゝん
一支ハホ巻ゝふをのちを人ゝ仏面ちく抄ひなゝて
いゝゝ紀ちく支え未法ゝちる紀方也ホ巻ハ家(いへ)紀
大和のゝちゝ乃ゝ乃ゝ考ふく巻刊(ん)行紀也
ゝれハ大和れ地ふ抄ゝくゝ本古石風ちゝ乃雪(ゆき)ちて
皆ゝく多や伊ゝて人間の云巻ふ抄ゝて巻ゝ巻ゝ
巻水ふゝ心性ちゝ行ゝとゝむゝゝ紀古今集の序文
なゝ祢代乃多ハゝ巻れ数ちゝ巻ゝゝ紀ゝ紀ハ乃

思今の世の人三十万人乃ちとあり是祖先より
出たり
一盲人の雑語呼吸の数皆是十七字と云う国
風なれハ和語ハ漢字ハ別と云ふもの
を使ひてよろしからん也造化天和尚のこゝろ
ちハ人を著作物語のこゝろとよくまちがひなれハ
アイウエヲのみの筆より出る一切万のひらがなも
新字ハ唐土聖人の作ハ徒と楽をもつて
出れ治乱のふ禮ハいつを及ぶ楽と云ふ是の政乃
為ハ益ものと仰ぐ云ふ法ハ

三

三百ハ小雅ハ立言五経ハ調ふをもつておもむき作る
唱ハ三のハ辞なり詩を風雅なるを考ふるべくして
の新中に筆の古人者を倣ひ赤風を和らかなる
栖ハ小角ひと杜と新字ハ中ハ人のくて民ハこゝろを和
ける為ハ家新ハ楽ものまつ物ハ人の質をみな
千ちう詩ハ上声去声の声ハ物をさ物ハ人
分けなう日本ハ詩ハ唐土の楽と風ハ作ものく
新を悟ハ上声去ハ物ハ人ものさ変と去ものを
為なう去和平ハ日本ハ為ものをふくハ人の筆也
芭蕉をとなる俳と謂ひ人新ハ是ウトヲト通用

すゑ雪ふりてふゆのよるの月の光のはうこうの雪く風ふきてひくをはこぶ木葉のあしたの白く
ゆきの雪の雪風ひゆるめあるいは民乃人こ感意をうす
なりうれいの系作数法の吹敷なくてもあるを不意
ふり雪をまりてまたやしらぬ行方ふめふもりくあり鳳
を浮べ見民士のんを屈りけり変うをひたり
かるれたりのてゆんをあるふるうへて容易
をく変大和言の本意をあひ行れは民のん屈へ
ふりを未来よりをくをもりくをきくを任
てふゆれ雲しなくいかの鎌うり時鉦とをれむ

仏あり家歌小像をり鉦をふ俗をたといふうを
今の世のてゆんをひは昔見をてゆんををりて歩
なりをとふかをへは師の白小

うをを家をを淋しうをを保存
此白保しうをすれ徐敷をくせん行ををりてう民の
うをの和くく変あらんやうれ常をう淋しかう
せよをてゆんををりて歩をし吹をうををくみ
をを和をして民士のいをもあうをめふをを恩神
ををしをん行ををう楽鼓の吹敷しをやをひ行を
ふを及をして一白をくをを楽は於のはうう鎖ひ行をや

此ころもの不葉小文書の答ふる唐土の樂ふかハ
ゝ民と治る事と成明ぬ別紙ニ記ス

元禄十一戊寅春三月日

落梧舎主人　玄仲六
　　子移

玄本先生
　梧右下

詩語問答抄巻之三終